

# 宮古・八重山諸島に関する覚書

今 林 直 樹

## はじめに

本稿は沖縄で「離島地域」として知られる宮古諸島と八重山諸島について、歴史と文化に焦点をあててまとめたものである。これまで沖縄の歴史や文化については、主として沖縄本島を中心に語られてきたが、近年では宮古諸島や八重山諸島で成立し、展開した歴史や文化にも関心が寄せられるようになっていく。宮古諸島と八重山諸島をあわせて先島諸島というが、先島を構成する島々には島固有の歴史や文化があると同時に、宮古諸島や八重山諸島それぞれの全体に関係する、あるいは先島諸島の全体に関係するものもある。

本稿ではそうしたもののなかで重要と思われるものを整理することによって、今後の「離島研究」につなげていきたいと考える。以下、はじめに宮古諸島について紹介し、次いで八重山諸島について触れる。

## 一、宮古諸島

### (一) 宮古島の綾道

近年、宮古島への関心が高まっている。それは「雪塩」に代

表されるように、宮古島の特産品への関心であるとともに、宮古島に残る御嶽や史跡など宮古島独特の文化への関心ともなっている。

離島観光地として観光需要が増加している状況を受けて宮古島市が取り組んでいるのが「宮古島市<sup>30</sup>。歴史文化ロード整備事業」である。平成二十四年度にスタートしたこの事業において、宮古島の御嶽や史跡を訪ねる散策コースとして整備されているのが「綾道」である。「綾道」とは宮古島の言葉で「趣のある道」という意味である。宮古島市教育委員会は、観光客が「綾道」をたどって宮古島の歴史や文化に触れることができるように、その名も『綾道』という冊子を作製した。平成二十五年三月に『綾道 砂川・友利コース』を刊行したことを皮切りに、二〇一七年一月現在で『平良北コース』『下地・来間コース』『宮国・新里コース』『戦争遺跡編』の五種類を刊行している。なお、この綾道にはロードマップも作成されている。もちろん、地図は冊子『綾道』にも記載されているが、ロードマップの方がルートがより細かく、かつ写真入りで記されているので、観光客はその道順にしたがえば、掲載されたすべての史跡を訪ねることができるようになっていく。

試みに、『平良北コース』をたどってみよう。『平良北コース』は道のりが約四キロメートルであり、徒歩で約三時間のコースである。そこには御嶽や史跡が三十二ヶ所紹介されているが、そのうち十三ヶ所が御嶽であり、十九ヶ所が史跡である。以下、主として『綾道 平良北コース』の記述をもとに、

主要な御嶽と史跡を紹介しておきたい。

はじめに御嶽について紹介する。御嶽には漲水御嶽や涌川まさりや御嶽、芋又主御嶽、船立堂などがある。

漲水御嶽は宮古島で最も重要な御嶽であり、古意角・姑依玉二神による宮古島創世神話や人蛇婚説話などの話が伝わっている。また、十五世紀末から十六世紀初めにかけて宮古島を統治した仲宗根豊見親玄雅が、一五〇〇年に八重山諸島の石垣島で勃発したオヤケアカハチの乱に際して漲水御嶽に戦勝祈願をし、見事勝利を得ることができたので御嶽の囲いを新しくして信仰を深くしたというエピソードも残っている。

涌川まさりや御嶽は「竜宮伝説」を伝える御嶽である。沖繩では海の彼方にあるとされる「ニライカナイ」思想がよく知られているが、宮古島に残っているのは海の底にあるとされる「竜宮」である。但し、この御嶽に残る「竜宮伝説」に登場するのは浦島太郎や亀ではなく、涌川まさりやという名の漁師と魚のエイである。また、まさりやが竜宮から持ち帰ったものも「玉手箱」ではなく神酒が入った瑠璃色の壺であったという。

この壺はまさりやのわがままな一言で白鳥と化して宮国村を経て姿を消してしまふ。

芋又主御嶽は宮古島に芋を伝えた砂川親雲上旨屋（長真氏旨屋）を祀る御嶽である。一五九四年、砂川親雲上旨屋は琉球王府に出向いた後宮古島に帰る途中で中国に漂着して三年間中国に滞在した。一五九七年、旨屋は宮古島への帰途についたものの再び遭難し、九州に漂着した後宮古島に帰り着いた。旨屋の

持ち帰った芋が台風や旱魃にも強く宮古島の風土に適していたので次第に芋が主食となり、旨屋は「芋の神様」として祀られるようになったという。琉球への芋の導入は、一六〇五年の野国総監によるものが最初であるとされており、旨屋による宮古島への芋の導入はそれよりも八年早いことになる。

船立堂は久米島から宮古島への鍛冶伝承を伝える御嶽である。昔、久米島按司の娘が兄嫁の讒言により久米島を追われ、憐れに思って同行した兄とともに宮古島に流れ着いた。娘は島の「カネコ世の主」と結婚して九人の子を授かった。成長した子どもたちは母を久米島按司に会わせてあげようと久米島に向かった。久米島按司は自身の過ちを悔いて鉄巻物などを引き出物として授け、一行はそれらを持って宮古島に帰った。そしてそこから宮古島で鍛冶が始まり、五穀豊穰となって宮古島は栄えたという。ちなみに、この御嶽に祀られている男女の神の名は男神が「カネトノ」、女神が「シラコニヤジツカサ」という。宮古や八重山の島々に残る鉄器伝来説話に関わる人物には「カネトノ」すなわち「金殿」の名を持つ事例が他にもみられる。例えば、竹富島の「根原金殿」などがそうである。なお、宮古島北部の狩俣には、これとは別に、大神島から渡来した人々が穀物と鉄器を伝えたという話が残っている。いずれにしても、島外からの技術や文化の導入による島の繁栄をうかがわせる伝説である。

次に史跡について見ておこう。代表的な史跡として豊見親墓と仲屋金盛ミヤカ、仲屋まぶなり御嶽、ドイツ皇帝博愛記念

碑を紹介しておきたい。

豊見親墓とは、先述した仲宗根豊見親玄雅の墓とその三男である知利真良豊見親の墓、そして仲宗根豊見親玄雅を祖とする忠導氏の後妻を葬ったという「あとんま」墓のことである。仲宗根豊見親玄雅は、先述のとおり、十五世紀末から十六世紀初めにかけて宮古島を統治した人物である。その功績を稲村賢敷にしたがってまとめると、①飲料水用の井戸開掘による水資源の確保、②一五〇〇年に石垣島で勃発したオヤケアカハチの乱の鎮圧、③琉球王府の命を受けての税制の確立、④下地橋道の築造、⑤鬼虎治下の与那国島制圧、そして⑥琉球王府第二尚氏王統第三代尚真王への宝刀「冶金丸」献上となる（稲村賢敷、『宮古島庶民史』、三一書房、一九七二年）。

この豊見親墓は宮古島に在来のミヤーカーと呼ばれる様式と、沖縄本島に見られる亀甲墓に代表される横穴式墓地の折衷様式となっている。このミヤーカーについて、稲村賢敷はミヤーカーが巨石で囲われているために巨石墓地として、西欧地中海沿岸に残るドルメンに似ているためにドルメンの一種として紹介されていると記している。宮古島には代表的なミヤーカーとして大立大殿のミヤーカー、川満大殿のミヤーカー、多良間島の土原豊見親春源のミヤーカーなど多くのミヤーカーが残っている。稲村は前掲書でミヤーカーを規模の大小と石工技術の優劣によって上中下の三級に分類している。規模が大きく石工技術も優れているミヤーカーが上級であり、川満大殿や土原豊見親春源のミヤーカーなどを挙げている。

仲屋金盛ミヤーカーと仲屋まぶなり御嶽についてはあわせて触れておきたい。

仲屋金盛ミヤーカーは仲宗根豊見親玄雅の長男である仲屋金盛のミヤーカーである。仲屋まぶなり御嶽は、仲屋金盛の娘、まぶなりを祀った御嶽である。まぶなりの父、仲屋金盛は仲宗根豊見親玄雅の長男であったが、『忠導氏系図家譜正統（原）』には「不届きに付き家督を継がず」と記されている。稲村賢敷はこの仲屋金盛とその統治について「（金盛は）武勇ありて智徳を欠き、殊に遺業を継いで未だその基礎も充分ならず人心動揺して居る際に、紊りに干戈を動かして金志川家を討滅したので、いったん静まりかけた島内の秩序再び乱れんとし、人心離反の兆候が現れた」と記している（稲村、前掲書）。稲村の記す「金志川家討滅」こそ仲屋金盛の犯した「不届き」であった。琉球王府がその責任を究明しようとするに及んで、仲屋金盛は自刃して果てた。世に言う「野原岳の変」である。

昔、仲宗根豊見親玄雅の家臣に金志川金盛と那喜太知という兄弟がいた（慶世村恒任の『宮古史伝』では二人は仲宗根豊見親の庶子となっている）。仲宗根豊見親にしたがって石垣島や与那国島に遠征し、多くの手柄を立てたが、兄の金盛は与那国からの帰途、多良間島で亡くなった。弟の那喜太知は宮古島の城辺地域を治める主長となり、金志川豊見親と呼ばれた。その金志川豊見親の威勢を妬んだのが仲屋金盛の家臣、中屋勢頭であった。中屋勢頭は仲屋金盛に対し「（金志川豊見親が）主家なる仲屋金盛を倒して彼自ら宮古島の頭職になろうという野心を持つ

ている」と讒言し、金志川豊見親には「金志川豊見親が主家を滅ぼして島主になろうという野心を持っていると仲屋金盛が疑っている」と讒言した。その後、間もなくして仲屋金盛から宴に招かれた金志川豊見親は宴が行われていた野原岳に馳せ参じたが、宴もたけなわとなった頃、仲屋金盛の合図とともに森林の中から伏兵が現れて金志川豊見親を討とうとした。金志川豊見親は自らが主家に手向かう理由もなく、心には一点の曇りもないと訴え、刀をくわえて断崖から飛び降りて亡くなった。

領民は金志川豊見親の死を悼み、事の次第を王府に訴えたため、仲屋金盛は尚清王の怒りを招いて糾問されることになった。ここに至って、仲屋金盛は自らの行いを恥じるとともに、讒言した中屋勢頭を手打ちにして自害したのである。

仲屋まぶなりは、野原岳の変後、金盛の犯した罪科によって王府に召し出された。当時、重罪人の子女は「オヤケコ」と称して王城内に召し使われるならいであつたという。しかし、まぶなりは故郷の宮古島を忘れることはなかった。『宮古島旧記』は「其の身は金殿玉楼に遊んで天上の姿を得るといへども吾が故郷を思ひ忘るるひまなければ、あかき夜々楼上に上りて西海をながめ、夜半の鐘声に煩惱の眠りをさまし、南風除るに來りて袖に入れば故郷のおもかげ目の前にうかぶ」と記している。こうしたまぶなりの様子を痛ましいと思つた国王がまぶなりを召し、寵愛した。そして、まぶなりは懐妊したのであつたが、それが城中の女官たちからの嫉妬を招いたため、まぶなりは国王に請うて宮古島への帰島を許された。ところが、船頭が

まぶなりの美貌に迷い、なんとかしてまぶなりの側近くに行つてたばかろうと思つたが果たせず、故意に針路を誤つて多良間島に漂着したという。多良間島の浜に漂着したまぶなりに「仲井またす」という者が非礼を働き、まぶなりはとうとう息絶えてしまった。そして、「あらぶ立よのし」という者がまぶなりを見つけ自分の着物を脱いでまぶなりの遺体にかぶせ、人を集めて衣装を新しくして「ふたつ瀬」に葬つたという。仲屋まぶなり御嶽はこのまぶなりを祀つた小さな御嶽であり、まぶなりの墓は多良間島に今も残っている。

ドイツ皇帝博愛記念碑は、ドイツ皇帝ヴィルヘルム一世の命によつて一八七六年に建立された記念碑である。一八七三年七月九日、宮古島南部の下地村宮国近海でドイツ商船ロベルトソン号が座礁した。七月十二日、島の人々が船長ヘルンツハイム以下の乗組員たちを助けて手厚く介抱した。人々は乗組員たちを三十四日の間歓待し、その後那覇に送致して帰国させた。この報告を受けたヴィルヘルム一世が軍艦チクロープ号を宮古島に派遣して建立させたのがこの記念碑である。記念碑には漢文で次のように記されている。

歳在一千八百七十三年七月間、由德国漢布海口馳出兎伊羅被孫夾板船一隻、途經太平洋山島海沿、誤触礁石而毀。船主享恩害模及水手人衆、荷蒙被処土人從驚濤駭浪中措緒衽席之上三十四日、歛納周旋始終如一。迨此歲八月十七日歸而述於衆、朕聞甚嘉島民之存心仁厚也。乃立碑島側俾垂之後世以誌

不忘云。

大德意志国奉天承運皇帝布国主威立熙御筆

## (二) 宮古諸島の遠見番所

先島諸島の各地には遠見番所がある。

宮古諸島では、池間島に残る池間遠見番所をはじめ、宮古島狩侯の狩侯遠見番所、島尻の島尻遠見番所、砂川の砂川遠見番所、来間島の来間遠見番所、多良間島の八重山遠見番所と宮古遠見番所などが残っている。このうち、宮古島市に属する池間・狩侯・島尻・砂川・来間の五か所の遠見番所は、平成一九(二〇〇七)年三月に「先島諸島火番盛(遠見番所)」として国指定史跡となっている。また、多良間村に属する多良間島の二か所の遠見番所は昭和四九(一九七四)年一〇月に村指定文化財となっている。狩侯遠見番所跡に設置されている「先島諸島火番盛」という案内板には、この他にも宮古諸島の水納島に二か所、八重山諸島の石垣市に二か所、竹富町に七か所、与那国町に二か所の火番盛名が記されており、遠見番所が島の人々の生活に重要な役割を果たしていたことがうかがわれる。

『球陽』巻五の「尚賢王」の項には、遠見番所のことを記した次のような記述がある。

始めて烽火を各処に設く。

本国、烽火有ること無し。或いは貢船、或いは異国の船隻、外島に来到すれば、只、使を遣はして、以て其の事を稟

報するを為すこと有り。今番、始めて烽火を中山の各処並びに諸外島に建つ。而して貢船二隻、久米・慶良間・渡名喜・粟国・伊江・葉壁等の島に回至すれば、即ち烽火二炬を焼き、一隻なれば即ち烽火一炬を焼く。若し、異国船隻有れば、即ち烽火三炬を焼き、転次伝へ焼きて、以て早く中山に知らしむるを為す。

尚賢王は琉球王国第二尚氏王統第九代国王で、一六四一年から四七年まで国王の地位にあったが、二二歳の若さでこの世を去っている。その生涯は短いものではあったが、遠見番所制度を設けたことで琉球王国の歴史にその名を残した。一六〇九年の薩摩の琉球侵略以降、実質的に薩摩の支配下にあった琉球王国は、江戸幕府の下で鎖国体制がととのえられつつあった当時の状況を受けて、異国船の監視を求められていたであろう。尚賢王の父で先代国王の尚豊王の一九(一六三九)年には「南蛮の人、八重山に飄到し、一幼女を掠め取り、開船して回り去る」という事件のあったことが『球陽』に記されており、鎖国体制への協力ということだけではなく、島と島民の生活を守る必要からも遠見番所の制度は急がれたのであろう。狩侯の遠見番所に設けられた案内板に記された説明によると、狩侯遠見番所は「主として沖繩本島を往還する上国船、漂流船の発見・監視など、広く海上警備の役割を果たしていた」とあり、続けて次のように記している。

伝承によれば、この遠見には遠見番が日夜、交替で海上の監視にあたり、船影を発見すると、すぐさまブンミヤ（村番所）の役人に連絡をとったという。ブンミヤにはソウカツ（総聞）、ユーサズ等の役人が詰めていて、船影発見の連絡を受けると急ぎ、集落の庶民をジャーツカイ（伝令）として蔵元へ走らせたと言われている。

海の彼方からやってくる異国船の船影を発見した時には島の人々に緊張が走ったであろうから、こうした事態に備えて日頃から即応体制が求められていたと想像される。

果たして遠見番所は海上警備の役割だけを担っていたのだろうか。そうではないのではないか。そういう思いを持ったのは狩俣遠見番所にのぼったときであった。遠見台の正面には大神島があった。狩俣に残る伝承では遠い昔に東方からやってきた人々が大神島に漂着し、彼らが狩俣に移り住んで農作を始めた。狩俣で「ものごとの根源、宗家などの意で血縁集団や祭祀集団の先祖神」を表す「シダデイトウ」の神は大和から狩俣に鉄をもたらして鍛冶を始め、鉄製農具を作って広めたのだという。この伝承もさることながら、沖縄本島では浦添ようどれ・斎場御嶽に久高島を配置し、伊是名島では伊是名玉御殿に降神島を配置することであらわされている琉球独特の世界観。それは琉球における他界観とつながっているのではないかという犬飼公之氏の指摘は、宮古島狩俣集落と大神島の関係を考えるときにも示唆に富むと言つてよいであろう。久高島は「神の

島」であり、降神島と大神島にはそもそも島の名前に「神」が含まれている。琉球の世界観、他界観を表すためには神が作った、あるいは神が降りたもうた聖なる島を配置することが必要であった。狩俣遠見番所はなぜその場所に設置されたのか。それはそこにのぼって大神島をみることで説明できる。遠見番所は単に海上警備の必要からのみそこに設置されたのではなく、聖なる島である大神島を拜むという島の人々の世界観を反映した拝所としてそこに設置されたのである。

### (三) 多良間島の史跡

多良間島には土原豊見親春源の墓である「ウブメーカ」をはじめ、多良間神社や運城御嶽、泊御嶽、嶺間御嶽、そして八重山遠見台、宮古遠見台など、貴重な史跡が残っている。

土原豊見親春源は八重山諸島の石垣島で勃発したオヤケアカハチの乱で活躍した人物で、乱後、多良間島の島主となった。オヤケアカハチの乱は、琉球王国第二尚氏王統第三代国王であった尚真王治世下の一五〇〇年に起こった叛乱であり、それまで形式的なものに過ぎなかった琉球王国の宮古や八重山に対する支配が実質的なものへと変わる契機となった事件であった。そして、王府の軍とともにアカハチの乱を鎮圧するのに功があったのが宮古島の仲宗根豊見親であり、多良間島の土原豊見親であった。乱後、論功行賞として仲宗根豊見親は宮古島の頭職になり、仲宗根の次男である祭金は八重山の頭職になった。そして、土原豊見親は多良間島の島主となり、この時に豊

見親の称号を授けられたのである。

多良間の史跡については、この土原豊見親春源の墓である「ウプメーカ」から紹介したい。先述のとおり、「ウプメーカ」は「ミヤーカー」という宮古諸島独特の形式で造られた墓であり、稲村賢敷が前掲書で上級に分類しているように、保存状態がよく、「ミヤーカー」の形式をよくとどめている。すなわち、中心に遺体を納めた屋根型の石積みを設置し、その周囲を石積みの塀が囲っている。入口はアーチ型の石積みとなっている。なお、この南側には土原豊見親の妻のミヤーカーがある。

すぐ近くには多良間神社がある。祭神は土原豊見親で、創建は明治三五年である。当時、多良間小学校の校舎を改築する必要から、校長であった進藤栄が島内に残る各御嶽に御神木として伝えられていた木を伐採する計画を立てたが、島民が神罰の降ることを恐れてそれを拒んだため、進藤自らが伐採して見せ、神罰もなかったことから島民が安心して伐採に踏み切ったという。しかし、だからといって進藤は「神罰」がなかったことを「御神木など迷信に過ぎない」というように一笑に付しはしなかった。彼は島民の感情を逆なでするのではなくむしろそれに寄り添って、神罰がなかったことを土原豊見親の御加護によるものだとして多良間神社を創建したのである。

多良間神社から少し歩いたところに運城御嶽と泊御嶽がある。この二つの御嶽も土原豊見親に関係がある。『琉球国由来記』には両御嶽の由来が概略次のように記されている。

多良間島に伊知の按司夫婦がいた。慈悲深き正直者の夫婦で仏神を信仰すること篤かった。夫婦が嶺間に耕作にいったとき、津波であろうか大浪が起こって人々を飲み込んだが、伊知夫婦だけは助かった。その後、男子一人、女子二人の三人の子が生まれた。男子は名を土原大殿と名づけられた。この土原大殿に「ヲソロ」という孫がいた。若い時から敬老愛幼の志が深く、朝夕に天を拝んでいた。ある時、運城御嶽と泊御嶽に神霊が光り輝いて天降るのを見たヲソロはこれに拝み、崇敬した。

これに続けて『由来記』は、このヲソロが、多良間島の塩川村にいた「ハリマニキヤモヤ」という悪逆無道の者を討つために、運城御嶽と泊御嶽に援護を仰いだところ、「ヲソロの信仰心が深いゆえに『ハリマニキヤモヤ』を退治できる」との神託が七歳の女の子に下り、これに勢いを得たヲソロが「ハリマニキヤモヤ」を討ち果たしたと伝えている。そして、このヲソロなる人物こそ後の土原豊見親春源となる人物であった。

土原豊見親関連の史跡については、これらの他にも土原豊見親の両親を祭っている「土原ウガム」（多良間の表記では「ム」には半濁点が付く）があり、仲筋集落では毎年八月に豊年祭としての「八月踊り」がここ土原ウガムで開催される（なお、塩川集落の八月踊りはピトゥマタウガムで開催される）。

このように多良間島には土原豊見親関連の史跡が多く残るが、もちろんそれだけではない。例えば、塩川集落に残る「嶺

間御嶽」を見てみよう。この御嶽の祭神は嶺間按司である。嶺間按司は一四世紀末頃に実在したとされる人物で「神名遊び」の伝授で知られているが、もう一つ「キムンディバ、ティーンディバ、キムピイキ」(「キ」「イ」には半濁点が付く)の言葉を残した人物としても知られている。この言葉は「氣立てば手を引き、手が出たら氣を引け」の意味である。なお、これに類する表現は、沖繩本島の糸満にある白銀堂など、各地に残っている。

八重山遠見台と宮古遠見台は、先述した先島諸島に残る遠見番所の一つである。とくに、八重山遠見台については、多良間島の最高標高である三十二・二メートルの地点に建設されている。現在、この遠見台の周囲には草木が茂って「遠見台」の役割を果たしていないが、多良間島は宮古島と石垣島のほぼ中間に位置しており、建設された当時は遠見番所としての役割を果たしていたであろう。

## 二、八重山諸島

### (一) 石垣島と石崎卓爾

沖繩は台風の進路上に位置しているため「台風銀座」とも言われる。

沖繩でこの台風正面から挑んだ人物として知られているのが岩崎卓爾である。岩崎は、一八六九年、宮城県仙台市の生まれで、一八九八年に中央気象台附属石垣島測候所の勤務を命ぜられて石垣島に赴任し、以後、四〇年の長きにわたって気象観

測を行った。岩崎は、石垣島では「天文屋の御主前」として島民から慕われ、定年退職後も気象台の嘱託職員として石垣島に残り、一九三七年、石垣島にて六十八年の生涯を閉じた。その生涯は、大城立裕により『風の御主前』に描かれ、映画にもなった。一九三三年四月には測候所の敷地内に岩崎の胸像が建立されてその功績が讃えられたが、岩崎は気象観測だけに留まらず、八重山の歴史や文化にも強い関心を持った。その成果は『ひろぎの一葉』『やえまカブヤー』『石垣島気候篇』といった著書や、諸雑誌に発表した数多くの文章にも表れている。その他にも、『八重山島由来記』などの史書や文書資料を全写したものもあり、いずれも八重山研究には不可欠の第一級の資料であり、これらは『岩崎卓爾一卷全集』(伝統と現代社)に収められている。なお、岩崎が先鞭をつけた八重山研究を引き継いだのが、後に「八重山研究の父」と呼ばれた喜舎場永珣である。

岩崎の『全集』には台風に関する文章ももちろん収録されている。例えば、大正十二年九月末から十月初めにかけての「みどり丸颱風」と名付けられた台風に関する文章をみてみよう。

(大正十二年九月)二十九日(月齢十八、三)颱風は北に進み宮古島附近に占拠し、北東に転向せんとせり、島は北西の風暴風雨となれり。十九時風向西となるや風力一層加はりたり、二十時頃波浪暴漲鎌の状となって沿岸に破浪し、池畑店石堀約五間、県道を崩潰、古賀店の防波堤、私立天気予報標柱を倒し、発動機船三艘、伝馬船若干破損せり。



同三十日（月齡十九、三）風声雨声共に猛烈となり、風速毎秒累進しつつあり。石垣島錨地に避難したる「みどり」丸（台湾総督府水産指導船）雪山の涛、海の瀬氣に酔ふて苦戦しつつありしが六時二十分毎秒二四、八米の最強に達せし頃、碇綱吹断せられ風に圧流して浅礁に坐したり。乗組諸氏健在なり。

台風の猛威が真に迫りくるような文章であるとともに、「乗組諸氏健在なり」という末尾には安堵感を覚える。なお、この冒頭には「かじ、たんがしや、ゆいかばぬ」（吹き初め北東なれば必ず吹き返しは南西となる）、「すさにし、かぜー、にーつきいしん、くるばすん」（九月頃の大風は要石をも転ばす）、「たいふーや、にーらぬ、すくまでふく」（大風は地獄「にーら」の底に吹通さる）といった方言による俚諺が紹介されているが、単に気象情報だけでなく、それらを八重山の方言や風俗、文化をも織り交ぜて記すのが岩崎の文章の特徴である。

ところで、岩崎の『全集』には「雨乞ひ祭」と題して「雨乞ひの調」が収録されている。その文章を一部であるが紹介したい。

- 一、水モト、拝ムンユウ。（水源ノ神様ニ、川ノ神様ニ。）
- 一、ス百川ニ、拝ムンユウ。（拝ミ、白シ。）
- 一、雨フシヤヌ、ナラヌユウ。（雨ノ欲キ事ヨ。）
- 一、水フシヤヌ、ナラヌユウ。（水ノ欲キ事ヨ。）

- 一、雨サアリド、育ツアリユウ。（雨ガ降ラネバ）
- 一、水サアリド、育ツアリユウ。（水ガ無ケレバ衆生ハ育ツ事ナラス。）

- 一、アンバシイ、ナラヌユウ。（斯様ナ苦シキコトヨ。）
- 一、クリバシイ、ナラヌユウ。（堪エラレヌ辛キ事ヨ。）
- 一、家ノミイカツ、出テ立チ。（家々、軒々ノ者）
- 一、キブリノミイカツ、出テ立チ。（総出ニ出テ。）
- 一、願フタコト、アラシタボウリ。（合掌シテ願ヒ白シ。）
- 一、手ツル事、アラシタボウリ。（事ヲ叶ハサレヨ。）

人々が生きていくために水が不可欠であることは言うまでもない。台風がもたらす被害が大きいことから、台風のマイナス面ばかりが強調されがちではあるが、その一方で、波照間永吉によれば、「祭祀の世界からみると、台風を忌避するための儀礼はない」とのことである。島に生きる人々にとって生死にかかわる最も深刻な問題は旱魃であり、水不足であった。岩崎の『全集』の「年譜」には二ヶ月を超える旱魃の記録を数多く確認できるし、沖縄の島々には「ガー」と呼ばれる井泉が必ずあることも忘れてはならない。そうした現実を考えると、台風のもたらす雨はまさに「恵みの雨」「命の雨」でもあったのである。

## （二）石垣島の石化伝説

石垣島には女性の石化伝説が残っている。代表的なものは

「野底マーペー伝説」とよばれるもので、この伝説は八重山民謡の「ついんだら節」に詠われている。この「野底マーペー伝説」とは「マーペー」という名の女性と「カニムイ」という名の男性との悲恋物語である。

マーペーもカニムイもともに黒島出身であった。しかし、琉球王府が石垣島に「野底村」を建設するために、人口の多い黒島から石垣島への強制移住を行った結果、マーペーは石垣島に移住し、カニムイは黒島に残ることになってしまった。マーペーはカニムイ恋しさに一日でもいいからカニムイの住む黒島を見ようと野底岳に登っていった。しかし、標高五二六メートルで沖縄の最高峰である於茂登岳に阻まれて黒島を見ることはできなかった。悲しみにくれたマーペーは野底岳の頂上でそのまま石になってしまったという。

『球陽』巻十二「尚敬王」の項には次のような記事が見える。一七三二年のことである。

八重山黒島は、本島を離ること海路五里の外に在り。田地甚だ狭く、人民増繁し、飲食堪へ難し。川平村属地に一曠野有り。名づけて野底と叫ぶ。泉甘く土肥え、宜しく五穀を種うべし。黒島の民人、往来には舟を用ひ、田を耕し地を鋤き、以て労苦を為す。是れに由りて、在番官・酋長呈請して、彼の島民人四百余名を分けて、此に移住せしむ。乃ち之れを叫んで野底村と曰ふ。因りて与人一人・目指一人を設けて総理せしむ。

「野底マーペー伝説」を考察した高木健は、当時、薩摩の支配下にあつて苛酷な搾取を受けていた琉球王府が財政を立て直すために行ったこうした八重山諸島の開拓政策について一定の理解を示しつつも、道切り政策と強制移住によって苛酷な労働を強いられた八重山の人々がマーペーやカニムイを創り出して抵抗を試みたのではないかと論じている。すなわち、オヤケアカハチが「力」で権力と戦つたのに対して、マーペーは「愛」を貫くことによって抵抗を試みたというのである。(高木健、『石化伝説―野底マーペーに見る世界―』、『八重山文化論集』第二号、一九八〇年)。

高木は、柳田國男の『日本伝説名彙』に基づき、「石・岩」に関する民話や伝説が日本国中で約一五〇種類以上もあると考えられると記している。試みに、同書で女性が石化する伝説を探ってみると、「女房石」(福島県)、「望夫石」(佐賀県)、「女郎岩」(大分県)、「美人石」(熊本県)などいくつも見出せる。「女房石」は松川与作という漁師が漁に出て何日経っても帰って来ないので、妻は無事を祈っていたがその甲斐もなく悲しみのあまりに石になったというもの。「望夫石」は狭手彦が唐土に渡る時に残してきた佐与姫が、狭手彦の乗った船を追いかけて姫神島に至り、高所に登って見渡したがもう船影が見えなくなり、悲しみのあまり石になったというもの。「女郎岩」は平家滅亡のときある村に逃げていた一人の女諱が一人の武士に捕えられ責め殺されたため、その怨みで石になったというもの。「美人石」は景行天皇が御所浦を船出して北上したとき、姫が

妊娠していることを知って姫を浦の漁村に預けた。姫は都の父を慕い、毎夜、海岸に出て東の空を眺めて泣いていたがついに石化したというもの。「女郎岩」のように怨みで石化した例もあるが、「野底マーペー伝説」も含めて、父や夫、恋人など親しい人、恋しい人を恋慕う気持ち、会いたくても会えないというそのつらい気持ちが女性を石にしてしまったのである。

石垣島北部の久宇良岳のふもとは「アイナー石」（アイナマ石、花嫁石）と呼ばれる石がある。昔、石垣島の伊原間の女性が平久保の青年に嫁ぐことになった。親が決めた結婚で仕方なく承諾したものの意に沿わなかった。嫁ぐ日になり、伊原間から平久保へと向かう途中、その女性は「用足しがしたい」と言つて道から離れた所へ入つていった。しかし、いくら待つても帰つて来なかつたため、様子を見に行つてみたところが花嫁の姿はなく、大きな石がそこに立っていたという（『大浜の民話1』、石垣市教育委員会）。先に「マーペー」は王府の道切り政策や強制移住に対する抵抗の表現として八重山の人々によって創られたという高木の説を紹介したが、「愛」を貫くことで抵抗を示したマーペーとは違い、この石になった花嫁は「愛」のない、強制された結婚に対する抵抗の姿として石になったのである。

「野底マーペー伝説」と「アイナー石伝説」。ともに女性が石化するという共通点を持ち、石化の原因は正反対であるが、ともにそれが抵抗の表現と考えられるという共通点を持っている。いま一つ共通点を探るとすれば、それはともに「かなし

み」を語っているということではないだろうか。「かなしみ」、すなわちそれは「悲しみ」であり、「哀しみ」であり、「愛しみ」である。これは先に見た他県に残る女性の石化伝説にも共通する点であろう。

### （三）石垣島の津波石

二〇一五年四月二十二日、南米のチリでカルブコ火山が噴火し、四〇〇〇人を超える人々が避難した。それからわずか三日後の二十五日、今度はネパールでマグニチュード七・五の大規模な地震が発生し、五〇〇〇人を超える死者が出た。日本でも、二〇一四年九月に長野県と岐阜県の県境に位置する御嶽山が噴火し、五〇人を超える死者が出た。さらに、二〇一六年四月十四日、十六日に熊本で大地震が発生したことは記憶に新しいところである。その他にも広島で起きた土砂災害など、日本でも毎年のように大規模な自然災害が起きている。その中でも大きなものが六年前の東日本大震災であったことはいうまでもない。

東日本大震災においてその被害を大きくした最大の要因は津波である。十数メートルの高さに及ぶ巨大津波が沿岸の住宅を、自動車を、逃げ遅れた住民を、ことごとく飲み込んだ。そして一瞬にして町は残骸と化したのであった。

石垣島の東海岸には津波石群があり、国の天然記念物に指定されている。「津波大石」はその一つであるが、この石は約二〇〇〇年前に発生した「先島津波」によって運ばれてきたも

のだという。高さが六メートル弱、重量が一〇〇〇トンとも推定される巨大な石をここまで運んだ津波の威力の凄まじさがわかる。その他の「津波石」は、今を遡ること約二五〇年前の一七七一年に発生した、いわゆる「明和の大津波」によって運ばれてきたものである。この「明和の大津波」については、牧野清による詳細な研究がある（『八重山の明和大津波』）。

この「明和の大津波」が起こったのは尚穆王の二〇年、西暦一七七一年三月一〇日のことである。なお、『球陽』には尚穆王の九年、西暦一七六〇年三月二十九日と四月十五日に複数回にわたる大地震があったこと、また同王の十七年、西暦一七六八年六月九日にも大地震があり、首里城や玉陵などの石垣が被害を受けたことが記されており、尚穆王の治世が多難であったことがわかる。『球陽』の記事の冒頭を確認しておこう。

此の日辰刻、國中より久米及び慶良間島に至るまで、地大いに震ふ。退潮の時、屢次、海水猛騰し、尚満潮に似たり。宮古島に在りても亦辰刻地震ふ。一刻の間に大浪騰涌すると三次、或いは三丈五尺或いは二丈五尺或いは十二三丈にして、大石を岸上に揚置す。其の岸、海際より高きこと五尺許りなり。宮国・新里・砂川・友利・池間・前里の六村、伊良部島内伊良部・仲地・佐和田の三村、多良間島内仲筋・塩川の二村及び水納島共計十二村は浪に冲壊せらる。其の内、宮国・新里・砂川・友利は、房屋及び石墻・樹木・土地・悉く洗蕩せらる。

ここに記された津波は、高さが二丈五尺だと七・五メートル、三丈五尺だと一〇・五メートル、十二三丈だと三〇メートルという想像を絶する巨大津波であった。そして、打ち上げられた津波石は海面から五尺、すなわち一・五メートルの高さに運ばれた。この記事は宮古諸島の島々での津波の様子であるが、この後には八重山諸島の様子が次のように記されている。

又八重山に在りても亦辰刻地震ひ、忽ち東南より大浪騰涌し、石垣・新川・登野城・大川・平得五村、浪に洗蕩せらるること一半許りに及ぶ。真栄里・大浜・宮良・白保・伊原間・安良・桃里七村は悉く漂流せられて跡無し。土地も亦多く洗蕩せらる。黒島・新城の二島及び附近の小邑共計十九村は、多く房屋・土地を損す。

この後も大津波に関する記事は続いている。

「明和の大津波」に関する『球陽』の記事は、今読んでも色褪せてはいない。それは東日本大震災の記憶が筆者の中でまだ色褪せていないからであろう。「歴史は繰り返す」といい、「天災は忘れた頃にやってくる」という。東北の被災地では「震災遺構」の保存をめぐる賛否両論がある。遺構の保存の是非については置くとしても、記憶の継承はきちんとしなければならぬ。事が天災である以上、私たちの力でその発生を抑えることはできないが、天災の記憶を後世に伝えていくことはできる。それは私たちの後を引き継ぐ者たちへの責務であろう。そ

の記憶が色褪せるようなことがあってはいけない。大浜の「津波大石」はそのことを自らの存在自体で語っている。

#### (四) 西表島

八重山諸島で最も大きな島は西表島である。

「西」と書いて「イリ」と読む。「東」は「アガリ」である。それが「日の入り」と「日の出」に対応していることは「子どもにでも解ける」と仲宗根政善は書いている（『東西南北』、『琉球方言の研究』所収）。沖縄戦で「ひめゆり学徒隊」を引率し、その凄惨な体験から、戦後、平和の尊さを訴え続けた仲宗根政善だが、もともと仲宗根の専門は言語学であり、琉球方言研究であった。一九二九年四月、東京帝国大学文学部国文科に入学した仲宗根は、在学中に、後に「沖縄学の父」と呼ばれる伊波普猷や伊波と東大の同期で「国語学演習」を担当していた橋本進吉、そして仲宗根にとっては大学での一年先輩で後に世界的な言語学者となり、終生の友ともなった服部四郎らと出会い、彼等から影響を受けるなかで琉球方言研究への歩みを始めたのであった。仲宗根によれば、沖縄本島方言において、「アガリ」と「イリ」は、正確には動詞の「上ル」、「入ル」の連用形ではなく、「アガリ」は「アガ（上）ルへ（方）」、「イリ」は「イル（入）へ（方）」から変化したとみるほうが音韻変化の法則に適っていて正しいのだそうである。

また、仲宗根は、この「アガリ」と「イリ」がもともとは「ヒガシ」と「ニシ」であり、それがいつの時代からか「アガ

リ」と「イリ」に変化したのだが、それには「タブー」が関係しているのではないかと、次のように書いている。

東海から太陽のさしのぼるあの神秘的なうつくしさに、神威を感じた琉球の島人たちが、ヒガシとよぶことばをいみじくけて、アガルへといったのではなからうかという、うたがいもある。太陽のさしのぼるときに生まれた子どもは早死するともいい、西海に没するはなやかな夕日をじっとみつめるものではない、親の死にめにあえないなどともいい、らんらんと沈む夕日に思わず指をさし、指先きがきれると言われたことに、はっと気がつき、指先きを口にくわえながら、七回もぐるぐるまわっている子どもらの心に、古代人のタブーのおもかげが尾をひいているような気もする（前出、「東西南北」）。なお、仲宗根は、沖縄で「月」に「カナシ」をつけて呼ぶことにもタブーのにおいを強く感じさせられると記している。「テダ（太陽）とタブー」、「琉球語の美しさ」所収）。

西表島の地図を眺めてみると、島の北の端が「ニシ崎」で、南の端が「南風見崎」という地名になっている。沖縄の方言では「北」を「ニシ」といい、「南」を「ハエ」という。これも仲宗根にしたがうと、「ニシ」は北という方角だけを意味しているのではなく、「北風」をも意味している。「ハエ」も正しくは「南風」と記して「ハエ」という音をあてるのであるが、仲宗根は「ハエ」がもう南から吹く風という意味を失って南とい

う方角だけの意味になつていと記している。

上原港から西海岸を下つて白浜まで行くと、そこから船で船浮に行くことができる。船浮は半世紀前にイリオモテヤマネコが発見されたところである。また「イダの浜」という風光明媚な浜がある。

### (五) 波照間島

波照間島のことを島の人々は「パティローマ」と呼ぶ。民俗学の柳田國男や方言学の宮良当壮はこの島の名前の由来が「果てのうるま」にあるという。「果てのうるま」で「はてるま」。それが正しいとすると、波照間島はその名前が示すとおり日本最南端の島であるはずであるが、かつて波照間島のさらに南には「南波照間島」、島の言葉で「パイパティローマ」と呼ぶ島があるという話がまことしやかに信じられてきた。「天文屋の御主前」岩崎卓爾はこの「パイパティローマ」について次のような話があったことを記録している。

人頭税率愈々加ハリ負担ハ主トシテ中産以下ノ肩上ニ移サレケレバ、村民ハ藩政ノ請求圧制ヲ怨嗟セリ。順治五年（紀元二三〇八）尾久村（二本平田）ノ「ヤクアカマリ」民衆ノ窮愁ヲ救ハント、密ニ南方洋海ヲ普ネク探検シ漂渺ノ間二一ノ仙島ヲ発見セリ。樓閣玲瓏、綽約タル仙子棲ム、南波照間島ト名ヅク。

ヤクアカマリは圧制から逃れるためにパイパティローマへ移住することを人々に説いた。こうして老若男女四、五〇人が秘かに移住の準備をし、船に乗ってまさに出港しようとしていたとき、一人の女性が家に鍋を忘れたことに気づき、取りに帰った。人びとはその女性が戻ってくるのを待っていたがなかなか帰って来なかったため、もはやこれまでとその女性を一人残して出港し、「棄土」へと旅立つて行った。残されたこの女性について、岩崎は「婦息ヲ喘マセテ叫ベドモ呼応スルハ無情ノ潮、今ハ氣屈シ自ラ衣ヲ裂キ全身ヲ搔キ悶へ、覺エズ手ニセル鍋ニテ砂上ヲ搔キツツ狂乱声ヲ放ツテ泣キ心神喪失シ仆レタリ」と記している。

柳田は『海南小記』のなかで「新たな島を求めんとする心は、人の世中が住みうくなる更に以前から、久しく島人の間には伝はつて居たものだらう」と記し、この新たな島を求めるとは「島が尽きても絶えなかった」と述べている。また、『波照間島民俗誌』を著した宮良高弘は、一四世紀初め頃と推測される西表島から波照間島への人の移動の可能性に関する金閼丈夫の説をひきながら、波照間島から西表島東部へ水をとりに行くという行事を取り上げて、それは「島人が、神行事の折に、御嶽の井戸の水を汲み祖先の由緒ある場所へ水祭に行く慣行からみれば、波照間島と西表島との歴史的・文化的関連を明らかに意味している」と指摘している。西表島から波照間島へとやってきた古の人々は、そこで島が尽きても、その水平線のかたにさらに新たな島を求めるとをやめなかった。パイパティ

ローマは波照間の島人の心の中にたしかに存在していたのである。

### (六) オヤケアカハチ

波照間島はオヤケアカハチが生まれた島である。島にはアカハチ生誕の碑があり、そこには「アカハチ誕生の地 八重山の英傑オヤケアカハチの生まれた屋敷跡」と記されている。なお、アカハチは一五〇〇年に王府に対して反旗を翻すが、アカハチが拠点とした石垣島の大浜には「オヤケアカハチの像」が建てられており、アカハチが反逆者というよりは、地元では「英雄」として今でも崇敬されていることがわかる。

波照間島で生まれたこのオヤケアカハチについて、岩崎卓爾は『ひるぎの一葉』の中で次のように記している。

野生ノ豪侠児不遇ノ「オヤケ、アカハチ」生ル。容貌魁偉  
(筆者註 怪異の誤記か)、頭髮赤緒、長ク垂レ、齒ハ已ニ成人  
ノ如ク生イ眼光人ヲ射殺ス。産婦其ノ怪惡ノ形状ニ驚キ哺乳  
養育スルニ忍ビズ、他聞ヲ憚リ裙袴(湯卷)ニ包ミ、夜初更  
窃カニ海中岩礁ニ捨テテ去ル。

伝承の中のアカハチは、生まれた時点ですでに齒が生えそろっており、その眼光が人を射殺すほどに鋭いという尋常ではない容貌でこの世に生を受けた。「頭髮赤緒」とあることから、「アカハチ」の名はその髪の色から付けられたのである

う。しかし、その姿形のあまりの怪悪さから生まれてすぐに産婦の手によって海中岩礁に捨てられてしまう。哀しいエピソードである。しかし、後の「八重山の英傑」の人生はそこで簡単には終わらなかつた。岩崎は続ける。

生兒ハ濤ノ轟々壯烈ナル波ノ響、波シブキヲ真額ニ浴  
ビツツ、熟睡セリ、天明ケ漁舟岩礁ニ生兒ヲ認メ收拾シテ育  
セリ。

伝承とはいえ、壮烈な波の響を聞き、波しぶきを浴びながらも「熟睡」していたというのであるから何とも豪快である。夜が明けて幸いにして一艘の漁船に助けられたアカハチは、岩崎にしたがえば「長ジテ筋骨逞シク鉄ヲ鍛ヘタルが如ク」になり、「威名隆々」たる存在へと成長していった。そして、大いなる野望を抱き、単身、波照間島を出て石垣島へと向かうのである。岩崎は次のように記している。

彼レ、小島ニ蟄シテ小事ニ齷齪スルハ男子ノ屑シトセザル  
所、聞ナラク石垣島ハ原野広濶沃土相連リ、蒔カズシテ生ヘ  
耕サズシテ実リ無尽ノ宝庫と称セラル、割居ノ群雄ト角逐シ  
一層自己ノ野望ヲ成就スルノ便宜多カルベシト思ヒ単身空拳  
侵略セリ。

石垣島の島民はこのアカハチの行動を壮挙とし、アカハチの

勢力は「日数ナラズシテ優勢ナル兵力ヲ具備シテ一島ヲ披靡」するまでになったという。

一五〇〇年、琉球王国第二尚氏王統第三代尚真王の代に、アカハチが王府に対して反旗を翻したとき、八重山諸島は群雄割拠の時代を迎えていた。石垣島では大浜地区のアカハチの他にも、石垣地区の長田大翁主、川平地区の仲間満慶山英極、平久保地区の平久保加那按司がいた。石垣島以外では、西表島の慶来慶田城用緒、波照間島の明宇底獅子嘉殿、そして与那国島のサカイ・イソバが挙げられる。長田大翁主はアカハチと同じく波照間島の生まれであり、妹の古乙姥がアカハチに嫁いでいてアカハチとは姻戚関係にあったが、乱に際してアカハチには与せず、一時はアカハチに敗れて西表島の古見に逃げるも、やがて王府軍に合流してともにアカハチを討つことになる。慶来慶田城用緒は平久保加那按司を討つとともに長田大翁主とは同盟を結び、アカハチと敵対した。仲間満慶山英極は長田大翁主に与していたためにアカハチに討たれ、明宇底獅子嘉殿もアカハチの呼びかけには応じず王府軍に与したためアカハチに討たれている。

こうした八重山諸島におけるアカハチ優勢という状況を受けてアカハチの前に立ちはだかったのが宮古島の仲宗根豊見親玄雅であった。仲宗根自身は宮古と八重山による先島連合のようなものを考えていたようであるが、アカハチが宮古島攻略を考えるに至り、王府に対してアカハチ討伐を進言するに至った。これを受けて、王府は戦船四六隻とともに約三〇〇〇の兵を派

遣した。宮古と八重山の反アカハチ連合軍は王府軍と合流してアカハチを討つたのである。

果たしてアカハチの野望とは何であったのか。なぜアカハチは王府に対して反旗を翻したのか。石垣島大浜の海岸にはアカハチの「足跡」が残っている。それは敗れたアカハチが逃げる際、「残念」と叫んで石を踏みしめたときにできたと思われる。その時、アカハチの胸に去来したものは何であったのか。

#### おわりに

以上、宮古諸島と八重山諸島に残る御嶽や史跡、伝説などをまとめてきた。こうした先島諸島に残る歴史や文化を沖縄・琉球史のなかでどのように位置づけることができるのか。それは重要な問題であり、今後の課題としたい。

#### 追記

二〇一六年度、筆者は「宮城学院女子大学特別共同研究費」を認められた。本稿は、この特別共同研究費に基く成果の一部である。